

[成果情報名] 諫早湾干拓地における加工用ハウレンソウ栽培の標準施肥量及び減化学肥料施肥体系

[要約] 加工用ハウレンソウの目標収量6000kg/10a、平均株重200g、平均草丈40cm以上の生育を確保するには、窒素施肥量で27kg/10a以上を全面全層施肥する。その場合の生育日数は、は種後約66日以上である。減化学肥料栽培を目指す場合、総窒素施肥量28kg/10aで3/4をナタネ油かす代替施肥するか、総窒素21kg/10aで2/3を鶏ふんで代替施肥する。

[キーワード] 加工用ハウレンソウ、施肥基準、減化学肥料栽培、ナタネ油かす、鶏ふん

[担当] 農林技術開発センター・干拓営農研究部門

[連絡先] (直通) 0957-35-1272

[区分] 総合・営農(干拓)、野菜

[分類] 指導

[背景・ねらい]

諫早湾干拓地における大規模営農では経営安定の方策として、契約等による加工・業務用野菜の生産の重要性が高い。加工用のハウレンソウが導入されているが、県下に栽培例、産地がなく、青果用としての慣行施肥量は設定されているが、加工用としての標準施肥量は未設定である。そこで、諫早湾干拓地での加工用ハウレンソウに対する標準施肥量を設定するとともに、減化学肥料施肥体系について検討する。

加工用ハウレンソウは、茹でた後の冷凍加工品として利用されており、葉肉厚く、葉色の濃いものが求められるため大株(200g以上)が良く、機械収穫が可能な草丈40cm以上を生育の目標としている。この目標を満足させる施肥レベルを標準施肥量として設定する。

[成果の内容・特徴]

1. 加工用ハウレンソウで目標株重200g以上を確保できる施肥レベルは、全層施肥で窒素施肥量30kg/10a以上であり、生育日数はは種後64日である。
条施肥では窒素施肥量30kg/10a以上で、は種後84日である。(図1)
2. 全層施肥で、窒素施肥量と平均株重との関係から目標株重200gを安定的に確保できる窒素施肥量は27kg/10a以上である。(図2)
3. 窒素施肥量30kg/10a全層施肥の条件下で、目標株重200gを安定的に確保できるのはは種後日数66日目以降である。(図3) 同様に、目標草丈40cm前後に達するのは、は種後65日目以降である。(データ省略)
4. 青果向けハウレンソウの慣行窒素施肥量の1/2量(窒素7kg/10a)を化学肥料とし、有機質肥料により窒素14kg/10a、21kg/10aを代替施肥すると、ナタネ油かすによる総窒素28kg/10a(硫安:N-7kg/10a、ナタネ油かす:N-21kg/10a)及び鶏ふんによる総窒素21kg/10a(硫安:N-7kg/10a、鶏ふん:N-14kg/10a)で十分な生育を確保できる。(図4)

[成果の活用面、留意点]

1. ナタネ油かすの多量施用は、発芽率が低下するので、は種の2週間以上前に施用する。
(21年度、研究成果情報)
2. 栽植方法は、株間10cmのシーダーテープ利用とし、条間30cm程度とする。排水対策のため、5~6m毎に明渠を設ける。

[具体的データ]

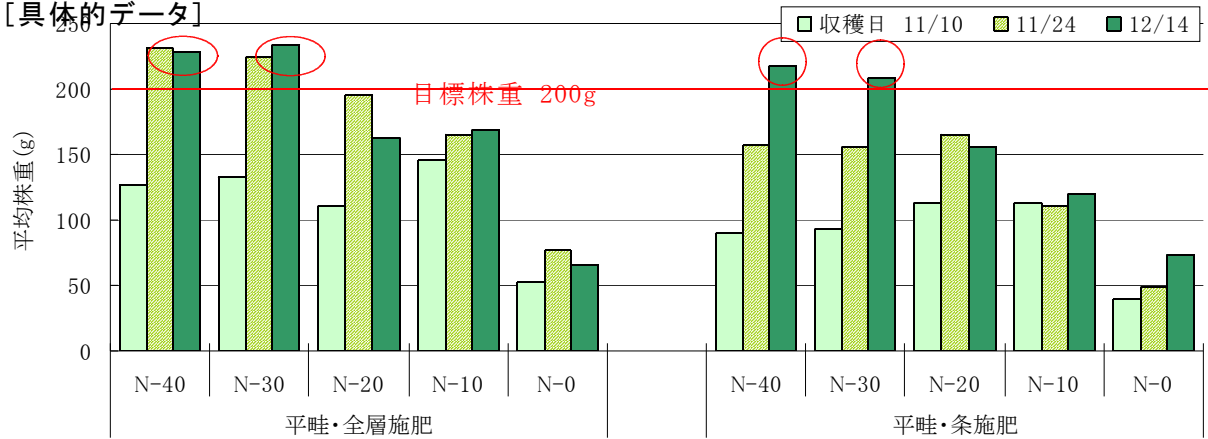


図1 窒素施肥量と生育（平成22年9月21日は種、品種：「クロノス」、33,000株/10a）

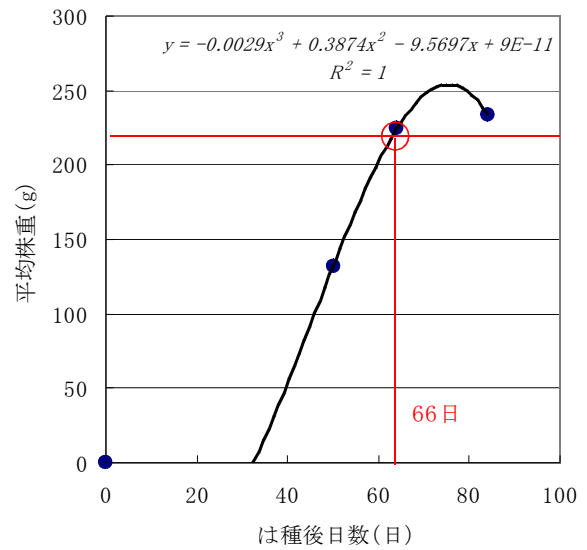
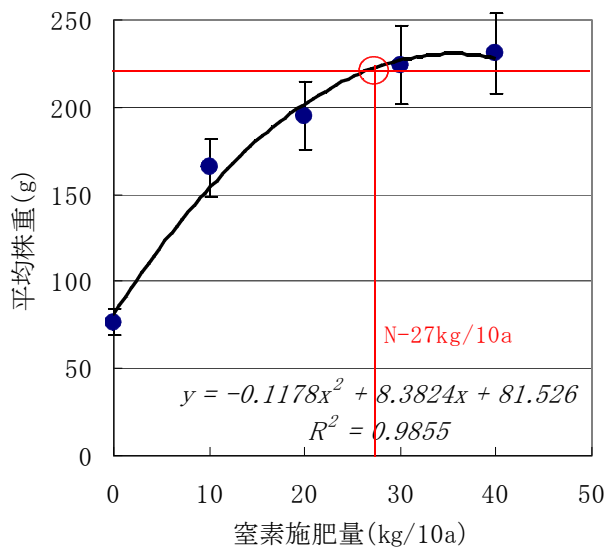


図2 窒素施肥量と平均株重の関係（は種後64日） 図3 は種後日数と株重の関係（N-30kg/10a）

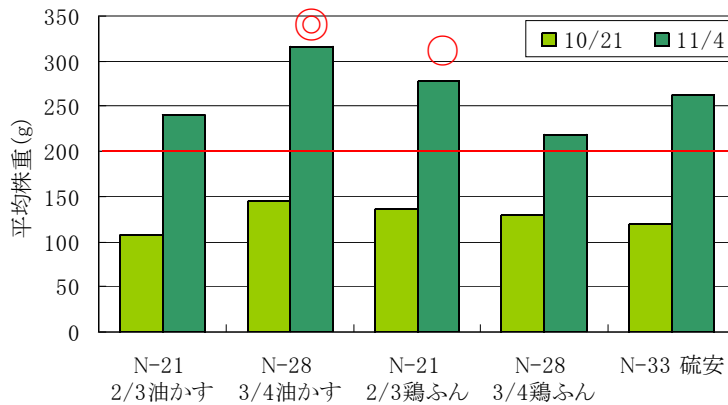


図4 有機質肥料施肥量と株重の関係（平成21年9月1日は種 品種「サプライズ」）

[その他]

研究課題名：諫早湾干拓大規模環境保全型農業技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2008～2010年度

研究担当者：小林雅昭、三木洋子

発表論文等：なし